

CES 2026が示すフィジカルAIと中国ヒューマノイド爆速進化の現在地

CES 2026では、製造・物流・サービス業における深刻な労働力不足を背景に、フィジカルAIとヒューマノイドが次世代の産業基盤として明確に示されました。人を前提とした運用は限界に近づき、現場設計の転換が進んでいます。一方、ロボット活用が省人化に留まる企業も多く、自動化やデータ活用の遅れが課題です。中国では量産化が加速する中、日本企業はPoCから本番移行に時間を要していることが競争力低下のリスクとなっています。

中国ヒューマノイド産業概況

中国のヒューマノイド産業は2025年にかけて急拡大し、フィジカルAI関連企業は230社超、人型ロボット企業は150社超に増加しています。AgiBotなどが量産体制へ移行し、試作段階から産業製品化が本格化しています。

資金調達額は約380億元（約7,600億円）、プロジェクト数は300件超に達しました。形態面では、二足歩行（51%）と車輪型（47%）が主流です。活用領域はデータ収集や教育・研究、サービスが中心で、工場導入は初期段階です。

先進ヒューマノイド企業の戦略や実装モデル

AgiBotは2023年の設立以降、エンタメ・接客から工場用途へと展開する、全方位型の実用化戦略を進めています。遠征シリーズ（人型ロボット）では、LLM×RAGによる高度な認識と運動制御を搭載し、身長169cm・体重約69kgの実用仕様を実現しています。2025年末に量産体制へ入り、ハード・ソフト・AI・製造を自社で完結する垂直統合体制を構築しました。2026年には製造現場への本格実装を進めるとともに、実ロボットによるデータ収集と蓄積を加速させています。

中国ロボット産業視察でのインパクトと気づき

2025年10月に実施した上海・杭州での現地視察では、急成長企業の圧倒的なスピードと実行力が際立っていました。設立数年で組織を急拡大し、若い経営層がリスクマネーとサプライチェーン連携を武器に「走りながら考える」開発を加速させています。ショールームでは基幹部品に至るまで公開しており、ハードウェア中心の価値提供から、ソフトウェアやデータを軸とした価値創出へと転換しています。主要部品を自社で製造するエコシステムにより、低コスト化と迅速な改善を実現しています。収益についても、ロボット単体の販売に依存せず、データとサービスを中心にエコシステム全体で獲得しています。

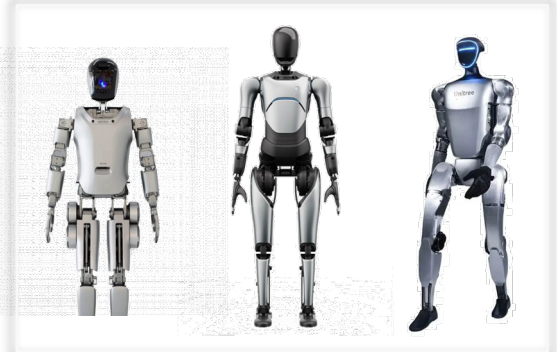
■ 本日の登壇者 ■



株式会社36Kr Japan
取締役
公文 信厚 氏



株式会社リョーサン
技術本部 応用開発部 アナリスト
江田 昌隆



先進ヒューマノイド企業（一部）

UBTECH（左） / AgiBot（中央） / Unitree（右）



上海にある世界最大級のデータ収集工場（AgiBot）

出所：投影資料より一部抜粋

[他のウェビナはこちらから](#)

リョーサンウェブサイト

